

説 教 聖日礼拝説教（2019年最終礼拝） 北浜チャーチ
黒田禎一郎

20019年12月29日（日）

主 題：「愛するあなたへの手紙」

—手紙の主旨—

テキスト：ピリピ4章10－20節

はじめに

- ・今日は、今年最後の聖日礼拝日です 神の恵みにより、2019年もここまで守られて、礼拝を守ることが許され感謝しております。皆さんにとって、この一年はどんな年であったでしょうか。北浜チャーチの今年1年は、別用紙で週報に挟まれていますので、どうぞご覧ください。
- ・皆さんもきっと楽しかったこと、大きな喜びに包まれたこと、励まされたこと、あるいは逆につらかったこと等、悲しかったこと、いろいろなことがあったと思います。
- ・私はこの1年間、公私ともに兄弟姉妹に祈られ支えられたことに感謝しています。今年も残り時間はわずかとなり、この年の幕を閉じようとしています。心を静めるならば、きっといろいろな思いが、浮かんでくるでしょう。ここで、心静めて、その一つ一つを思い出してみましよう。
- ・ところで、仮にイエスが物理的にこの最後の礼拝に参加され、この場に姿を現されたならば、私は何と言うのでしょうか。一番先に出る言葉は何でしょうか、私の口から出る言葉は；
 - ① 神へのお願いの言葉だろうか
 - ② 神への不満の言葉だろうか
 - ③ 神への感謝の言葉だろうか
- ・一方、イエスは私に何と言われるでしょうか。 私はこう思います。
「黒田よ！ 私はお前を愛しているよ。」 (I truly love you!)
 神のご性格、神の本性は「愛」です。神はその愛で、この私を今年一年間お支えてくださいました。イエスはヨハネ13章でこう言われました。
13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。
- ・この一年間、私たちはどれだけ神の戒めを守る忠実な者であったでしょうか。新約聖書の多くの部分を書いた使徒パウロ、彼はキリストの福音のために獄に

つながれた囚われの身でした。しかし、彼はなんと言ったのでしょうか。
ピリピ人への手紙4章

4:11 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。

- ・今日、私たちはパウロが語った「満ちたりる人生」について学びたいと思います。2点

大切なポイント

1. パウロの置かれた状態

- ・パウロはかつて熱心なユダヤ教徒。ユダヤ人が次から次へ、クリスチャンに改宗していく様を見て、彼は我慢できませんでした。彼はエルサレムの大祭司から、ユダヤ人改宗者を捕らえ、男も女も投獄してよいという、お墨付きをもらった人でした。
- ・彼は怒りに燃えてダマスコに向いました。しかしその途中、突然、彼は天からの「光」に打たれた。彼は失明し三日の間、目が見えず、食事も口にできませんでした。
- ・彼はその時。天からの声を聞きました。「わたしはあなたが迫害しているイエスである」と。彼は霊的無知とはいえ、自分が行ってきた迫害はメシアへの攻撃であったことを悟りました。そして彼は、イエスをキリスト（救い主）として受け入れ信じたのでした。かつての迫害者が回心者となり、彼の人生は一変した。180度の転換です。そして彼はキリストの福音を伝える伝道者となりました。
- ・ピリピ人への手紙1章13節によれば、「私はキリストのゆえに投獄されている」とある。すなわち、この書簡は獄中から送られた手紙であったことが分ります。ところが、このピリピ人への手紙の特徴は「喜び」です。囚われ人でありながら、なぜ「喜びの手紙」を送ることができたのでしょうか？ 彼は4章11節でこう述べました。
「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。」
- ・皆さん。これは彼のやせ我慢ではありません。じつはパウロにとって、試練、苦しみ、痛みは第一の問題ではありませんでした。では、何が一番であったのでしょうか？パウロはいったい信仰生活において、何を学んだのでしょうか？
- * 私たちも、この年を振り返り、今年主にあって何を学んだか考えてみましょう。

2. パウロの信仰生活の祝福

1) 彼は奥義を心得ていた人でした

4:12 私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。満ち足りることに飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。ピリピ

- この文章は対比的表現：●貧しさと豊かさ
 - 飽くことと飢えること
 - 富むことと乏しいこと

すなわち彼の奥義 ⇒ 「ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得て」 いました。さらに彼は13節で、「私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」と語りました。これは素晴らしいことです。

- 人は両サイドの経験、すなわち人生の苦難と人生の祝福の経験、をすることによって学びました。片方だけの経験であるならば、例えば、豊か（富を持つこと）だけを経験するならば、一面的です。そして逆に貧しさ、飢え、乏しさだけを経験するならば、それも一面的です。

{例 話}

- 人が人生において受ける経験、とくに幼い時期に受ける経験は、その人の人格形成に大きく関与するものです。性格が非常にわがままな人がいます。物的豊かさだけの中で育ち、不自由をまったく知らない人がいます。他が見えない人もいます。又人格的に、首をかしげるような言動をする人もいます。
 - ある方は貧しさ、乏しさを経験したために萎縮しているのではと、思わされる人もいます。心理学者は、「それらの多くは幼少期の経験と無関係ではない。」と語っています。（しかし、キリストにあって回復は可能）
 - それほど幼少期の経験は、影響を与えるものです。しかも、それが人格形成につながるのです。パウロは子どもの時ではなく、大人になってその両方の経験をしました。皆さん。この原則は、人が霊的に成長するためにも適用することが可能です。
 - では、パウロがこの奥義を心得た背景には、いったい何があったのでしょうか？ ⇒ 神にあっての訓練がありました。
- ここに彼がバランス性を持つ器とされた奥義が秘められています。
- 彼は2コリント11：24－28で、次のような告白をしています。

11:24 ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、

11:25 ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。

11:26 何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から

受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難に
あ

11:27 勞し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物
もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。

11:28 ほかにもいろいろなことがあります、さらに、日々私に重荷と
なっている、すべての教会への心づかいがあります。

- ・ユダヤ教神学者としてはエリートコースを歩んできたパウロ、しかしイエスをキリストと信じてからは大きな苦難を味わった人でした。ここに彼が神の奥義を学ぶ「訓練」がありました。

・愛する皆さん。20019年、あなたにとっては「試練の年」であったかも知れません。しかし、ひとつ言えることがあります。⇒神がお許しくださったことです。すなわち、それらは神の訓練(レッスン)でした。許容範囲内ということです。神のレッスンは、有益であることを忘れてはなりません。しかも、その真意は後日判明するものです(ですから信仰とは、その真意を先取りすること)。

2) 彼は感謝の心を持つ人でした

- 4:14 それにしても、あなたがたは、よく私と苦難を分け合ってくださいました。
- 4:15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、福音を伝え始めたころ、私がマケドニアを出たときに、物をやり取りして私の働きに関わってくれた教会はあなたがただけで、ほかにはありませんでした。
- 4:16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは私の必要のために、一度ならず二度までも物を送ってくださいました。
- 4:17 私は贈り物を求めているわけではありません。私が求めているのは、あなたがたの霊的な口座に加えられていく実なのです。
- 4:18 私はすべての物を受けて、満ちあふれています。エパフロディトからあなたがたの贈り物を受け取って、満ち足りています。それは芳ばしい香りであって、神が喜んで受けてくださるささげ物です。

・パウロは、天幕づくりの仕事をしながら伝道しました。しかし一方では、ピリピの教会から愛の贈り物を感謝して受けました(15節)。つまり、

① 彼は自分に対し「原則」を待っていました。1コリント9章

9:27 むしろ、私は自分のからだを打ちたたいて服従させます。ほかの人に
宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするため
です。

彼は自分に厳しい人で、自分に出来るかぎりのことをした人でした。

② 他人に対しては「感謝の心」をもっていました。

ここに、主にある兄弟姉妹との関係を見ることができます。彼は同じキリストの心につながれる器官として、役割を認識していました。伝道者として支えられることは、神が教えておられることで、それを感謝の心で受けとめました。しかし、それに甘えることはありませんでした。

- ・パウロはこのように、自分に対してと他人に対して信仰の原則を持っていました。それが彼の人格の中心を支配していたのでした。

それは自分への厳しい原則、そして他人（信仰の友）への感謝の心です。

私たちがこの年を振り返り、「感謝の心を持つ人」になりたいものです。なぜなら全ての事柄は相働いて益となるからです。

3) 彼は信仰の人でした

4:19 また、私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。

ピリピ

- ・これは未来のことです。パウロ「私の神」(My God)、すなわち神を所有格で言い現しました。これはパウロと神との関係を示しています。彼には、「私の神は必要をすべて満たしてください」という信仰がありました。

① 神は豊かな富を持つお方であると信じていた

② 神は必要を満たすお方であると信じていた

⇒これこそ、彼の信仰です

- ・では、彼はこの信仰をどこで入手したか？

⇒ それは主と共に歩む生活を通して

彼は一度にして、信仰の人、感謝の心をもつ人、奥義を心得る人になったわけでは、決してありません。主と共に歩む毎日の生活を通してです。

- ・私たちはヨブの生涯を知っています。彼は想像を超えるほどの災難、不幸に会いました。一度に10人子どもを失い、また側にいた妻からも「神をのろいなさい」と言われたほどでした。しかし、彼はそれでも神に忠実でした。

そういうヨブに対し、神は彼の晩年に応答されました。

42:10 ヨブがその友人たちのために祈ったとき、【主】はヨブを元どおりにされた。さらに【主】はヨブの財産をすべて、二倍にされた。

42:12 【主】はヨブの後の半生を前の半生に増して祝福された。それで彼は羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つこと

42:16 この後ヨブは百四十年生き、自分の子と、その子の子たちを四代目まで見た。

- ・ヨブには次のような特徴がありました：
 - ① 妻から批判されても、神を信頼した
 - ② 自分の罪を悔い改めた
 - ③ 神に従順でした

ま と め

- ・私たちは20019年を振り返り、今どのような心で礼拝に出ているでしょうか？ そして一年を閉じようとしているでしょうか？ 感謝の心で？ 不満の心で？ 神は御子イエス・キリストをお与えくださったほどに、私たちを愛してくださった。イエスは私たちに、『互いに愛し合いなさい』と新しい戒めを与えられました（ヨハネ13：34）。
- ・今、イエスが私の前に物理的に姿を現してくださるならば、「黒田よ、わたしはお前を愛している」と言われるに違いありません。使徒パウロは獄中書簡をピリピの教会へ送りました。それは愛の手紙でした。そして、こう述べた。
「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。」ピリピ 4:11
- ・彼はすばらしいことを告白しました。
 1. 彼は奥義を心得た人でした
 2. 彼は感謝の心を持つ人でした
 3. 彼は信仰の人でした
- ・そして結論として、彼は20節で神に栄光をお返ししています。
4:20 私たちの父である神に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。
私たちも同じように、神に栄光をお返ししようではありませんか。

* God bless you !